

# 遠藤千胤旧蔵歌学関連資料瞥見

山本和明

## 要旨

遠藤千胤（えんどうちたね）旧蔵資料については、明治時代前期における歌学の一斑をうかがい知ることの出来るものとして、本誌四十二号でも報告をした。今回、先の報告では触れなかった資料について、①向陽会関係資料②千胤評歌合③千胤自筆紀行文という三点にわたり、資料翻刻と考察を行った。特に①では、明治天皇より京都在住華族に対してなされた歌道奨励の思召しにより、歌会・研究会（向陽会）が創設されたが、その創設に関わる経緯についてとりまとめている。②の千胤評歌合は、桂園派の流れを汲む千胤の歌学指導の一端を伺い知ることのできる資料の紹介。③の紀行文は、明治初頭の動乱のなかでの紀行、明治八年の正倉院御物の展覧を見学に行く際の歌群など、歌人たちの和文修練の具体例として提示した。明治前期のこうした資料はまだ十分に紹介されておらず、今後のための基礎的研究としての報告である。



## はつめい

明治から昭和にかけて、連綿と続いた「邦光社歌会」に関して、以前、「邦光社黎明期に関する基礎的研究―邦光社歌会記―」と題し述べたことがある（本誌第四十二号掲載）。その稿は、編輯に名を連ねた遠藤千胤旧蔵資料を調査したことが機縁となつて執筆したものであつたが、千胤旧蔵資料には、紀行文をはじめとして、他にも多くの自筆本が残されており、その後も折に触れ、当館古典籍共同研究事業センターDB係員を主なメンバーとして、くずし字の勉強会を兼ねて読み進めてきた。今般、その成果の一端を報告したい。

遠藤千胤については、遠藤家を訪問調査された兼清正徳氏によつて「桂園派歌人遠藤千胤」と題した研究が備わる『桂園派歌壇の形成』桜楓社・昭和六十年四月刊、初出「洛味」第二七〇・二七一集、昭和五〇年三月・四月。氏の研究により、遠藤家に残された資料のあらましを伺い知ることが出来たものの、実際にその資料を確認するに至るものではなかつた。その資料に再び光があてられたのは、平成二十七年「清興」書画・古書籍販売合同目録に「遠藤千胤旧蔵邦光社関係資料一括」として紹介されたことに拠る。資料群を点検するに<sup>(1)</sup>、兼清氏による概要紹介の内容と一致する点などからみて、たしかに遠藤家旧蔵資料と断定して良いように思われる。本資料群は、由来の明らかな資料として貴重であるとともに、明治前期の一歌人の手元に残された、当時の歌学や活動の有り様を伺い知ることのできる写本群類としての価値を有する。それらを翻刻し呈示しておくことは明治期の歌壇研究を進める上でも意義あることと考える。残された資料群より何点かを翻刻紹介をし、併せて考察を試みたいと思う。

## 「菊廼下葉」序草稿の「ことば」も

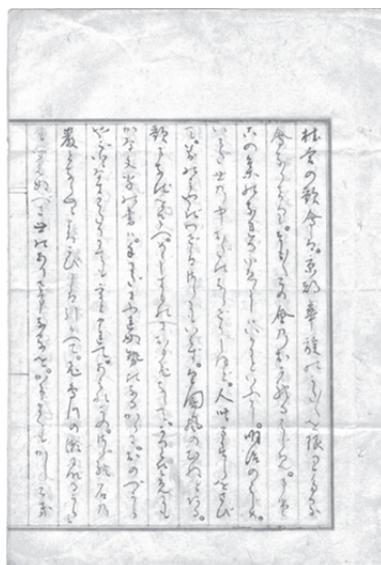
旧蔵資料のなかには、朱に印刷された片面十行の原稿用箋に、朱筆で記された近藤芳介自筆の草稿（墨付二丁半）が残されている。近藤芳介については那光社の紹介においても指摘したが、近藤芳樹の養子となり、伏見稲荷大社宮司を勤めた人物である。初名は佐甲織之助・久棟、号は静居翁、周防山口生、足代弘訓に師事。明治三十一年（一八九八）歿。芳介については、田畑善兵衛「近藤芳介翁について」（「朱」十七号、伏見稲荷大社）に詳しい。いま、芳介の草稿について触れた兼清正徳氏の文章を参考までに掲げておく。

桂宮歌会歌集 明治一八年に桂宮歌会歌集が出版される運びとなった。桂会は、明治天皇の勅慮により、京都華族に歌道奨励のために明治一一年頃から始められ、山本実政・宇田淵・村山松根・拝郷蓮茵・小出繁らが指導に当たった。月次会のほかに研究会も持たれ、三条西乗禅・大橋長憲・尾崎宗夫と共に千胤もこれに加わった。

明治一八年一月に近藤芳樹は桂宮歌会歌集に序を付して、その中で、「遠藤千胤などこの道にあつき人々をもつらならしめ給ひ、すべて桂宮にてなど行はれける。」を誌していて、当時にあつては千胤は既に一流歌人の列に互していることがわかる。歌道研鑽の労はようやく花咲き実を結ぼうとしている。（桂園派歌人遠藤千胤）旧蔵資料に残された、この記述のもととなった序文章稿を翻字したうえで、すこし検討を加えたい。

### 《序文章稿翻刻》

桂宮の歌会は、京都華族のかた／＼を限りたる会なりけり。そも／＼の会のおこれるはじめ。またこの集のなれるゆゑよしはいかにといふに。明治のはじめ。いまだ世の中おだひならざりしほど。人皆ますらをさびて。万の



近藤芳介筆序文草稿

はしめ給ひ。かつ宇田淵君にも。替けなすべく仰せおきてさせたまへり。実政卿かしこまりて（宇田君にはかり。）村山松根。拝郷蓮茵の両翁を教師に撰び。はじめてこの会をひらかれたるになむ。しかるに実政卿は。召されて東京へのぼらるゝによりて。宇田君もはら掌らるゝ事とはなりたり。また村山翁はなき人の数に入り。拝郷翁は八十に近きよはひなるをもて。いなみてしぞかれぬ。その後教師には。文学御用掛なる。小出繁君をもて。省内省よりさし遣はされ。かつおほなけれど。おのれをも其しりにつらならしめ給へりけり。又月次会の外に。研究会といふ事をも開かれて。此会には。三条西乗禪。大橋長意。尾崎宗夫。遠藤千胤など。（頭注 植松有恒）この道にあつき人々をもつらならしめ給ひ。すべて桂宮にてなむ行はれける。然あるのみにあらず。をりにふれて。高崎正風君をはじめ。侍従のかたぐもて。しばしせちにせめさせ給ひ。あるは臨時に題賜はりて。歌奉らしめ給ひなど。昔のねのいとねもごろなる。大御心しらびのほど。あなかしこなほざりにおもひ過すべきわざなら

みやびわざはさらにもいはず。皇国風のむねとある。歌まなびをさへ。めしきものにおもひなして。かりそめにもかな文字の書は。手にだにふれぬ勢ひなるからに。おのづからやごとなきわたりにてもうとまれて。あはれかの。さざれ石の巖とならむよるこびには引かへて。飛鳥川の瀬になるうらみも聞えぬべき世のありさまなるを。かけまくもかしこきすへらぎの大御心に。ふかくなげかせ給ひて。いにし明治の十一年ばかり。京都華族のかたぐに。歌学びせよと。うちしらの仰ごとありて。山本実政卿に。其事を擔

めやはと。会員の諸君。おのもくつとめはげまるままに。やそのしるしも歌はるゝばかりなるは。此道にとりてこよなきよろこびにこそ。かくて年月をふるまにく。濱の真砂の数多くつもりぬるが中に。あはれとおもふしらべ。をかしと見ゆる言の葉をつみ出で。すり巻となして。廣く世の風流士たちにもしめしなば。やがてふかき大御おもむけの。かたじけなさをもうかがひ知りて。おのづからこの道の。助けともなりなむかしと。宇田君こたびおもひおこして。小出君にあとらへて。えらばしめられたるなりけり。さてこの稿を。小出君よりおのれにしめされたるを。一わたり見侍りけるに。玉の中に石もまじれるこちせられて。芳介等が。えせ歌をさへ載られたるに。小出君みづからのを載られぬこそ。いとほいなきわざなりけれ。いにしへより。勅撰集はさらにもいはず。近き世かれこれえらび出せる。わたくしの歌集。みな撰者の哥をものせられたれば。などかははゞかることのあるべきと。宇田君にはかり。小出君にこひて。十首ばかりをかきそへ侍るになむ。

明治十まり八とせといふ年の十一月

近藤芳介誌

この序文章稿に従えば、明治十一（一八七八）年頃に明治天皇より京都在住華族に対し歌道奨励の思召しがあつたことになる。ちなみに『明治天皇紀』第四・明治十二年十一月十日条に、その後の経緯を含め記した文章が残されており、併せて確認する必要がある。

曩に天皇、京都在住華族に宮中月次御題を賜ひて詠進せしめられしが、更に其の歌道上達を誘掖したまはんとの勸慮あり。仍りて宮内卿徳大寺実則に内勅を下し、彼等をして旧来の家伝・秘事を廃し、風調正しく語格・仮名遣等に熟達せる師に就きて修業せしむべきこと、及び其の費用に充てんがため、是の月より三箇年間毎月御手許金三十円を賜ふべき旨を命じたまふ。又去月右大臣岩倉具視を京都に遣はしたまふに方り、宮内卿をして其の旨を具視に内示せしめたまふ。是の日実則、華族第六部長山本実政に内勅を伝へ、宮内省御用掛宇田淵と俱に誘導

勸奨に力めしむ。又其の教師として、高樹院前住職拝郷蓮茵、並びに村山松根若しくは渡忠秋を聘すべきことを  
 実政に命じ、且歌道に限らず、詩・文章を講習せんとする者あらば、同じく其の志望を達せしむべきことを以て  
 す。是の月二十四日始めて蓮茵・松根を聘して当座歌会を催す。会する者四十余人あり。

序文章稿にも同様に「実政卿かしこまりて（宇田君にはかり。）村山松根。拝郷蓮茵の両翁を教師に撰び。はじめてこの会をひらかれたるになむ」とあり、当初は拝郷蓮茵・村山松根を教師とし、山本実政・宇田淵などとともに毎月の「当座歌会」が催されていたことになる。草稿に従えば、その後、山本実政が東京へ、松根が亡くなり、蓮茵の老齢による辞去を経て、歌会の教師に小出榮が宮内省より派遣され、この序文章稿を記した近藤芳介も新たに加わったことになろうか。

草稿で注目したいのは「月次会の外に研究会といふ事をも開かれて、此会には三条西乗禪・大橋長憲・尾崎実夫・遠藤千胤など（頭注 植松有恒）、この道にあつき人々をもつらならしめ給ひ、すべて桂宮にてなむ行はれける」と指摘される点である。本資料の旧蔵者千胤と芳介との関係が伺える記述であるとともに、ここに言う「研究会」についても「予て在京華族の歌道奨励の思召を以て、今出川後門内桂宮御建物の一部を研究所として貸与あり、向陽会なる一団体を設け、御歌所に於て之れを監督せる」と記した明治三十四（一九〇一）年五月二〇日付朝日新聞朝刊記事「京都の歌道」を踏まえるならば、芳介、千胤などが桂宮建物一部を貸与された団体「向陽会」にて歌道教導に携わっていたことが判明する。なお、この向陽会について、纏まつて記されたものに恒川平一『御歌所の研究』（昭和十四（一九三九）年刊）がある。

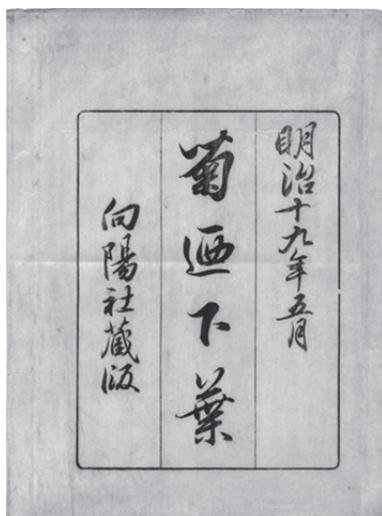
東京の興風会に対し、京都在住華族に対し、明治二十年四月に創立せられたもので、共に今日に及んで居る。創立の際は山階宮晃親王殿下が、祭主の宮として京都に御在住あらせられし為、親しく会長にあたらせられ、主殿

寮出張所長宇田淵翁が師範であつた。(略)

「明治二十年」とあるのは十二年の誤植。会に尽力した宇田淵亡きあとの「向陽会」で高崎正風が講演した記録である『高崎正風演説筆記』(明治三十四〔一九〇一〕年、国会図書館蔵 DOI : 10.11501/899457)では、明治十二(一八七九)年から同会が始まり、当時より「御歌所」から交代で歌人を派出して指導に当たったことが述べられている。参考までに任意に句読点を付し、一部引用しておく。

折柄西南の戦争後、世の中が紛乱して居つた場合でしたから、愈々此歌会がおこり、桂宮の御殿で催すことに決り、御歌所から世話をすると云ふ事になつたのは明治十二年であつたかと思ひます。(中略)乃で御歌所から人を撰んで出張する事に成つて数年の間、始終御歌所の人を交る々々派出して教授させて居つた。すると十数年を経過後、聖上の御沙汰に「最早京都華族の歌も大分進んだ様であるからして、何時迄も伝母を付けて置くやうにして当方から往つて居ては遂に独立する時節が無からふからして、これから御歌所も人を出すことは止めたら宜からうと思ふが、正風の見込はどうだ」と云ふ御尋ねが有まして、恰好私と御同感に存じましたから、上の思召しめし通り派出員を止る事に成り、其代に教師を此京都で人撰する事になつた。其頃村山松根、拜郷蓮茵、近藤芳介の三人が有名であつたからして、宇田氏と相談して其人達を頼む事に致した。爾うして宇田翁会員と協議し、侍従長・御歌所長へも相談の上、向陽会と名を付けて、山階の老宮が其会の長とお成りなされ、而うしてずつと続いて居る内に、村山が死亡し、続いて拜郷が亡くなり、其れで近藤一人に成つた。所が一人では老躰なか々々難義であるからして、則武、尾崎、須川の三人を其手助けとして、助教授と申す姿で歌の世話をする事になり、近藤氏が之れが上に居つて評の可否を決して詠進することになつた。

明治期における歌会を巡る研究が、まだ十分に進んでいないこともあつて、どの資料に基づいているか、その信頼度



菊廻下葉版本袋

は如何、といった点が不明瞭であることも少なくない。この『高崎正風演説筆記』にしても講演の口述筆記ということもあつて誤認に基づく発言（「十数年を経て後」といった記述）もそのままとなっており、複数の資料に基づき事実認定をしかかる必要がある。いずれにせよ、できるだけ原典資料から引用し呈示しておくことが基礎的研究として重要である。

この向陽会ならびに付随する研究会に関わる資料は、現在、宮内公文書館に「研究会録」として所蔵されている。平成二十六年秋に明治神宮文化館宝物展示室で開催された展覧「宮中の和歌 明治天皇の時代」（宮内庁宮内公文書館・明治神宮共催）の図録解説（豊田恵子氏執筆）に拠れば、在京都華族の歌会に出詠された短冊などが「宮中月次並京都華族等詠進」資料の中に個人別にまとめられているとのこと。また「研究歌会録」も同じく明治十三年九月から同二十七年までが収められており、こうした資料に基づく調査で、今後の一層実体の解明が可能となる。たとえば明治三〇（一八九七）年九月七日付朝日新聞朝刊には「歌合

古儀の復古」と題した記載がある。「往昔宮中に於て盛んに行はせられし歌合は（中略）維新以来は時世の変遷につれ一時絶えしは遺憾なりとて常に畏き邊りより歌道の御奨励を蒙りつゝある京都の向陽会にては曩に点取互選を復古し次で又古儀の歌合を再興することとなり」とあり、向陽会の果たした点取互選や古儀の歌合の再興といった試みも、短冊や歌会録等からより具体的に明らかにすることだろう。

さて、再び序文章稿の検討に戻る。向陽会に関わるものと判

於興雅之化亦未必無小補也  
刻成圖書卷端如此

明治十九年五月至殿權助正

五位勲五等宇田淵撰



正七位勲五等西尾善忠書

菊廼下葉序

こま乃向陽社の歌會なるを菊の華のしゆく  
アはるのふかふか今もさうさうすまばやくこれ今乃  
かえりてくゝんえ。さうさうさうのふかふかアアア  
いゝかアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアア

菊廼下葉版本序文

明し、いくつか絞り込むなかで、本資料は『幾久能志大播（菊廼下葉）』の近藤芳介序文の草稿と判明した。両者本文を比較するに、草稿冒頭の「桂宮の歌会は」が「これの向陽社の歌会は」へ変更され、草稿文中の「おのづからやごとなきわたりにてもうとまれてあはれかのさざれ石の巖とならむよろこびには引かへて飛鳥川の瀬になるうらみも聞えぬべき世のありさまなるを」といった表現がカットされたこと、『幾久能志大播（菊廼下葉）』序文末尾の「かくてこの集を菊の下葉としも名づけられたるは上にいへるゆゑよしどもをほかに匂はせたるならむかし／＼しら菊の花のうてなの露ちりて下葉も千代の香にゝほひつゝ」といった表現が追加されているのが大きく異なる点である。そうした修正が「明治十まり九とせといふ年の四月」になされたとして、両者が概ね同様の本文を有することをみて、旧蔵資料の草稿をもとに、完成した序文を近藤芳介が記したとして宜しかろう。近藤芳介本人の完成原稿は、そのまま版木に貼り込み彫られたため、原稿そのものは残りようがないが、その元となった下書き草稿が、出版に尽力した遠藤千胤に譲られた（残された）ものと想定でき

る。序文に拠れば、向陽会での歌会などを重ね、「瀆の真砂の数多くつもりぬるが中に、あはれとおもふしらば、をかしと見ゆる言の葉をつみ出て、すり巻と」しようと宇田淵が発案し、「小出君にあとらへてえらばしめられたるなりけり」とあるように、小出榮が撰歌にあたったことになり、榮跋文や刊記からもそのことが確認しうる。しかし、この『幾久能志太播（菊廻下葉）』編輯においても、遠藤千胤が何らかの形で関与していたようだ。その旧蔵書類のなかには「菊下葉集歌人名簿」があり、歌集末尾に付されることの多い名簿などの原稿も千胤の手許に残っている。版本本文では、官位と名のみが記されているため、こうしたものもよき資料となろう。以下、「」は任意に付し、（ ）内は山本で修正を加えた数値。末尾の「正五位 宇田淵」以下が向陽会を指導する立場にあつた歴代人物と目され、遠藤千胤の名前も最後に掲げられている。なお、版本では「正二位（飛鳥井） 雅典」「正（従）三位（梅溪） 通善」が加わる。

《翻刻》 菊下葉集歌人名簿

正二位 中院通富／正二位 冷泉為理／正二位 清水谷公正／従二位 石野基安／従二位 三室戸陳光／従二位  
 三室戸雄光／正三位 梅濱通善／正三位 堀川親賀／正三位 飛鳥井雅望／正三位 倉橋泰聰／正三位 梅園実  
 紀／正三位 山科言綱／正三位 清岡長説／従三位 園基祥／従三位 愛宕通致／従三位 東園基敬／従三位  
 高丘紀季／従三位 町尻量衡／従三位 山本実政／従三位 油小路隆晃／従三位 倉橋泰顕／従三位 大谷光尊  
 ／従三位 大谷光勝／正四位 梅濱通治／正四位 油小路隆堦／正四位 高野保建／従四位 三室戸和光／従四  
 位 西大路隆脩／従四位 平松時厚／従四位 西洞院信愛／従四位 冷泉為紀／従四位 植松雅徳／従四位 花  
 園実延／従四位 清岡長延／従四位 梅園実静／従四位 中園実受／正五位 山本実庸／正五位 三室戸治光／  
 従五位 栗原輔長／正五位 京極高富／従五位 東久世通章／従五位 梅園実師／従五位 山科言綏／従五位  
 日野西光善／従五位 押少路師成／従五位 津守国美／従五位 中川興長／従五位 粟田定孝／従五位 松園尚

嘉／従五位 若王寺遠文／従五位 梶野行篤／従五位 藤枝雅之／従五位 玉松真幸／従五位 穂撲優香／正五位  
位 宇田淵／正七位 村山松根／正七位 近藤芳介／三條西乘禪／拜郷蓮茵／小出繁／大橋長意／植松有経／香  
川景敏／尾崎宋夫／遠藤千胤 六十四(六十七)人  
春歌七十首 夏歌五十四首 秋歌八十三(八十二)首 冬歌六十七(六十八)首 雑歌八十三首  
三百五拾六(三百五拾七)首 丁数五十七(五十八)丁

## 千胤判「十六番歌結」

遠藤千胤旧蔵資料のうち、千胤の歌学指導の一端を伺い知ることのできるのが『十六番歌結』一冊(写本・墨付十人丁)である。「歌結」と題する歌合資料は、文化十二(一一八一五)年跋刊『六十四番歌結』をはじめとして、その多くが桂園派関係で残されている。千胤が渡忠秋・春日潜庵門人であることは、兼清正徳「桂園派歌人遠藤千胤」に詳しく述べられており、本資料においても「しらべ」といった評語も多く確認できる。近藤芳介により「この道にあつき人々」の一人と位置づけられていた遠藤千胤のこの歌結の詠者については、本文中では、名前のみの記載であり、千胤旧蔵資料「社員仮名簿 邦光社」をもとに確認するに、西田輔兼(御幸町姉小路下ル 西田輔兼 清左衛門)・岡村直温(油小路三條上ル 岡村直温 五兵衛)・山田良金(下立売葭屋町西入 山田良金 平兵衛)・小森隆吉(富小路姉小路上ル 小森隆吉)・腰山重剛(間之町魚ノ棚下ル 腰山重剛)・中川長雄(六角油小路西入 中川長雄)は確認できた。残る「義弘」「方剛」は未詳。他の人物が京都在住であり、恐らく千胤周縁の京都在住の人物であろう。以下、翻字を示しておく(任意に濁点等を付した)。

《資料翻刻》 十六番歌結

壺番 行道霞

左勝 義弘

〱朝づく日かすみわたりて玉鉾の道ゆく人の袖も匂へり

右 重剛

〱行末もすぎこし方もみえざれば霞の中にわれは成にき

左 朝づく日の影ほのどくと霞のうちにさしわたりて道行人の袖も匂へるさま誠に春の姿にていみじうよみ出られたるはのどかにも承り侍れ

右 行末も過こしかたも見えぬまで立こめたる霞のうちに我は成にきといひすゑたるにちからありて聞え侍れど猶左のかたのうらゝかなるしらべにはおとれりと申べし

式番 餘寒雪

左 直温

〱大方は梅のさかりとなるものをまだ空さえて雪の降ける

右勝 良金

〱ひえの山のこりの雪を吹おろす朝かむ寒し白川の里

左 なべては梅のさかりなるにさえかへりたる空打くもり雪のちりほひ春ともしらぬが餘寒のならひとや申侍らん

右 ひえの山ちかき白川の里あたり身にしむばかりなる餘寒のさま尋此うしろのけしきにてみるがごとく覚え

侍れど風にのみちからいりて雪のかたうすく成行たるは口をしき心ちし侍れど左のおほとけたるにはおしかへして立勝れりと申べし

参番 橋辺柳

左勝 輔兼

〱春柳の糸にひかれて橋のうへをわたるとなしに過にけるかな

右 長雄

〱川橋を今にも風や渡るらんつゝみの柳うち靡くみゆ

左はこともなくさら／＼とよみ出られたるうちにおのづからうるはしき柳に心ひかれて危かりし橋のうへをもうち忘れてわたりはてしも餘韻に匂ひてよみ人もしらぬさかひなるべし

右ははしをといふ一句つまりておだやかならず春風の吹わたるをはしの縁によりてこと／＼しくよみ出られたるもてがらありとも見え侍らずつゝみの柳川むかひのうるはしき糸にはより合せがたくなん

四番 山家梅

左 方剛

〱柚人のすめる軒端の梅花おのがまに／＼咲匂ふなり

右勝 隆吉

〱何くまで咲つゞくらん山里の梅のたえまは家居なりけり

右 いづくまで咲つゞくらんとみわたしがたきまでになれる数万株の梅花の中に所々わらやなどありてもろこしの画にもうつし出たらん山里のけしきまのあたりに見えてるなう勝なるべし

左は右の絶景なるに見所なき柚人の軒ばの梅匂ひおよびがたしと申てん

五番 浦春月

左 義弘

〱浜ゆふの百重かすみて春夜の月面白き三熊野の浦

右勝 隆吉

〱おしするや浪花のうらの浦浪の霞にやどる春夜の月

此浜ゆふの百重といふことは柿本朝臣が「みくまのゝうらのはまゆふもゝへなす心はもへどたゞに逢ぬかも」  
と初て序によりみ出給ひしよりおほくつかひ来れるものから浜ゆふの百重霞みてと冠辞のやうにかぶらせるは例  
も聞侍らず「真熊野のうらの浜ゆふうら若みまだ一重なる初霞哉」と桂園翁のよみ給ひしはめづらしくめでた  
き歌也

右霞にやどる春夜月といひすゑられたるに暮るもくもと晁親卿の給ひしにもをさ／＼おとらぬ姿と申侍らん  
三熊野難波いづれもおもしろきあたりにて三熊野もなつかしからぬにはあらざめれど見馴たる難波のうらに心  
とゞまり侍りぬべし

六番 帰雁遙

左持 方剛

〱ひとつらのなかはかすみて久かたの雲みはるかに雁かへる也

右 重剛

〱帰る雁晴たる空に消へ行はあまり遙になればなりけり

一つらのなかば霞みてなど餘情ありとも覺え侍らず又晴たる空にきえゆくらん幽なる影おなじつらに見わたさ  
れていづれも大空のとりとめがたき雁の行へたゞおぼろ／＼としてさだかには見わきがたかりけらし

七番 遠見花

左 輔兼

〱咲花をおもふころは遠山の霞とゞもにかゝりける哉

右勝 良金

〱足曳の遠山ざくら夕日さす雲の色にはまがはざりけり

左 いつしかと待たたりし花の匂ひ出たらん遠山を思ひやりておのが心も身にそはずなりゆくはいたくも花を  
めぐる真心を打出られたる心のうちきはめてゆかしく聞なされていかでたゞに見過すべきわざならねど凡ても  
のを思ふといふことは心のうちにのみ在て外には顯れぬはかなきわざ也みなといふとは違ひ侍らん

右 今まで立まがひたる山のはのしら雲は夕日の影にさながら紅となれるに花の色のみ鮮にみゆめる遠山のけ  
しき手にとるまでによみ出られし意詞優にして立あがりたる高きしらべ誠にまがふかたなき勝と申てん

八番 惜落花

左勝 直温

〱皆人の惜むころをしらずしておのがまに／＼ちる桜哉

右 長雄

〱まゝならばさそふ嵐を我袖につゝみて花はちらさじ物を

右 いかにか花をなじまんとてかねては花のためつらしと思ひしあらしなるを袖につゝまるといふもにげなきわ

ざならんに初五文字まゝならばとは俗言にちかく聞え侍るにや

左 皆人のをしむ心に対しておのがまに／＼散さくら哉とうたう人をよみ出られたるに深く落花を歎じたる勢  
ひ言外に願れて哀にもおかしくも侍るべし

九番 春山田

左 義弘

ゝ水せきてあらずきかへを蛙なく井手の山田のはる雨の頃

右勝 良金

ゝ賤の男が打かへしたる小山田に霞もしめも引はへて見ゆ

蛙なく井出の山田の春雨は哀ふかく見ゆめれど凡田にはすきかへしたる後にこそ水もせきいるゝものになん前  
後取たがへたるやうに聞ゆるは例のかたくなる老のひが耳にや侍らん打かへしたる山田の原に引わたしたらん  
しめのかすみたる暮春の夕ぐれたゞならぬけしきさしてと思ひやられ侍りて尤勝にて侍るべし

拾番 河山吹

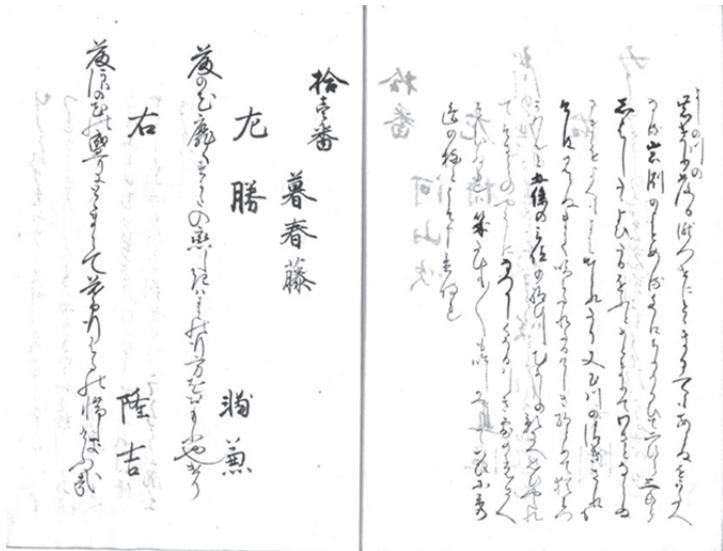
左持 直温

ゝ玉川の底のさゞれもみえぬまで咲みだれたる山吹の花

右 重剛

ゝみよしのゝよしのゝ河の岩渚にちりてたゞよふ山吹花

よしの川のとぎり落る瀧つせにとゞまるでもあらぬをかたへなる岩渚のよどめる水にちりうかびて二ひら三ひ  
らしばしたゞよひたるをふとめとまりてわざとならぬさまをよくもよみ出られたり又玉川の清きさゞれも今



十六番歌結

は見えぬまで咲みだれたるけしき駒とめて猶みつかはん  
 と五條の三位の給ひしむかしの影さへ思ひやられて今さ  
 らのやうになつかしくうるはしき露の光さへそひぬれば  
 幾たびも／＼も吟じかへしてつひに秀逸の持とこそ申置  
 侍れ

拾壹番 暮春藤

左勝 輔兼

藤の花靡くすがたの恋しきは春の行方をおもふ也けり

右 隆吉

藤浪の花の盛りにとどまらで暮行はるの惜しきけふ哉  
 むらさきの色ふかく咲出し藤のさかりなるけふしもつれ  
 なく暮行らん春は心うきわざ也と歎じられたるもさるこ  
 となれど春の行へを思ふにつけて打しなへたるふぢの花  
 の姿をさへひたすら慕はれしは優にやさしき心ばへには  
 判者の心もこよなう靡き侍るべし

拾貳番 関路雞

左 方剛

逢坂のせき路を行にはつどりいまや鳴んと告渡るなり

右勝 長雄

ゝあふ坂のゆふつげどりの鳴聲にほのぐしらむ関の杵村

左 何ばかりのふしもなきがうへに結句てにをはたがひたればのがれがたき難と申べし

右 詞はおだやかに聞え侍れど意めづらしとも承り侍らず左右ともおなじ八聲のしらべなれど左の難あるには  
いさゝか勝りぬべしと申侍らん

拾三番 渡待舟

左持 義弘

ゝ立出て舟わたせをとよぶ聲に乗後れじといそぐ旅人

右 長雄

ゝわたし舟はや漕かへれ待ほどに日は暮はてぬ雨はふりきぬ

此歌はいづくにもあれ渡せんとしける時舟の来るを待るをいふべきに乗後れじといそぐ旅人のうへをよみ出  
られたるは入ほかとや申侍らん二句舟渡せをと在はよとの誤ならんともゆるし侍れど題意のたがひたるはむか  
しよりいたき罪として誰もくさたし申ことに侍り

右は言意叶ひたれど餘りくだくしくいひ過てかへりて感をうしなへりと申てんこも二句早漕かへれとあるは  
漕やかへるとなくは聞えがたく左右ともおなじつみのがれがたしと申てん

拾四番 旅宿夢

左持 直温

ゝ古里の人にかたるとみし夢のさむればもとの草枕也

右 隆吉

ゝ古里を出にし日より草枕むすぶ夢さへ露けかりけり

右ははるくくと遠き旅路をかけて立出し其日よりやがて草の枕なれば露けき夢を結びし也と端邊の情をのべられしに今より分暮ん野山のさまも見えでつもり行らん日数の程もかねてよりおしはかられぬべう聞ゆるは専ら調べのうへにありて理を離れたるならん

左は夢のうちにかへり来て旅に在しこと共を故郷人にかたるとみし夢のはかなく覚てかへりみればやはりもとの草枕にぬることよとわりなき情を其俣に打出られたるは哀にも聞えてよき様なるべし

拾五番 海眺望

左勝 輔兼

ゝ海原の沖行舟のなかりせば雲のさかひを何にしらまし

右 重剛

ゝ久方の雲ぬにまがふ白浪をわけつゝかへる蟹のつり舟

左はちから餘り右はやすらか也いづれを勝とさだめいづれを負とせんと未練の判者しばらくたゆたひぬるに沖行ふねのりてはしるには蟹のつりぶねや漕おくれたりと申侍りてん

拾六番 寄神祝

左 方剛

ゝかばかりのゆたかなる世は天照す神と君とのみかげ也けり

右勝 良金

ゝ動きなき底つ岩根の五十鈴川濁らぬ御代を神ぞもるらん

畏こくも我大八洲国を知しめし給ふ皇命の大凌威は天照らす日の大神の御光とひとしき大御蔭をうふる也けり  
としたゝかに豊なる御代をたゝへしはうへなき祝ひと承り侍れどさるべき公の詔をうけて奉るべき歌ならんに  
はさはさて有なんおのがしゝよみ出る歌詠には思ひもかけぬことになんまた初五文字かばかりのと在ては是ば  
かりのといふことにてかり初めのといふにおなじことに当れりこはかくばかりとなくては理も聞え侍らず二句  
より末の調に思慮しがたくや侍らん

右は動きなきと諷ひあげしより神ぞもるらんといふまで滞る限なくしらべさはやかにして五十鈴川の濁らぬ水  
底なる玉座等の色も透とほりたらん心ちしてとかく申も憚ぬべきわざにこそ

地 　ゝ動きなき底つ岩根の五十鈴川にこらぬ御代を神ぞ守らん

人 　ゝ玉川の底のさゞれも見えぬまで咲みだれたる山吹の花

天 　ゝあし曳の遠山さくらゆふ日さす雲の色にはまがはざりけり

平千胤（花押）

羸輸録

左

義弘 勝一持一負二

方剛 持一負三

輔兼 勝三負一

右

良金 勝四

隆吉 勝二持一負一

重剛 持二負二

### 紀行文紹介

遠藤千胤旧蔵資料のなかには、原稿用箋や楮紙を仮綴にした紀行文が多く残されている。いくつか紀行文を翻刻紹介しておく（以下、濁点、句点等を加え読みやすくした）。

#### 《翻刻①》

#### 西山紀行

にし山のはなみんとて林重教をいざなひ烏丸にしきの亭をたちいづるは三月三日うま過るころ也。つとめてと思

ひしにせちのことなどにかゝづらひておそくなりたる也。

雨すこし降ければおのれは菅蓑をきいたくうちしをれて出

たり。東寺のまへをへて六孫王の御社にまうで四塚をにし

にをれて吉祥院なる天神の御社にまうでぬ。森のかたはら

に鏡井といふあり。こは御左遷の御時御影をうつし給ひし

ところとなん。

へ千早振神の心もいかならん花の影すむかぢみぬの水

道のほとりなるあやしき賤が家にいりてひさこの酒のむ。

多ひ心になりてうたひつゝ行。桂川にいで久世のはしをわ



西山紀行

たる。むかふよりうしの打つれて来たるをせばきはしのうへにかたよりてまちつるに危きことかぎりなし。

へかつら川ながるゝ水ははやけれどおそきはうしのあゆみ也けり

橋守のあしをこひければ

へのむさげにさのみは多はぬわれなれどはしにもあしをとられける哉

久世の里をすぐるに雨風いやふりにふりいや吹にふきおこりてあゆみがたく身もちるばかり也。

へさくら花たづぬる身には吹風を久世のさともきつる也けり

やうくをやみがたになりぬるに向日里につく。向日明神にまうでぬさたいまつるに花のちりければ

へ天津日のむかひの神にいのるかな花吹ちらす雨はれよとぞ

へ雪とちる花をさそひて降雨はみぞれに似たるものにぞ在ける

かくてまた長瀬川にかけたるうちはしをわたらんとしけるに橋守ぜにいだせといへどやがてかへりこん其時やらんといひてわけ行。

へ歸りにといふ空ごとをあとにして花にいそげるはしのうへかな

長岡の天神の御社にまうづ。神垣きよらかにみがけり。池のほとりにおりみて例のひきごとうでゝ打みやれば汀にさし出たる花の影にをしの残りて浮びたるけしき二なうけうあり。

へ長岡の池の汀に散花を雪と思ひてをしの鳴らん

なほあかねば今ひとつ

へさくら咲汀にかぶをし鳥と共にあそばんいざくるゝまで

雨はれたればうしろの山まつに入日はなやかにさしわたりて木間の花あざやかにみゆめり。とかくするうち日も

暮がたになりければ

へ雉子鳴わがとも岡はちかけれど霞かくれに成にける哉

粟生野の光明寺にまうづ。坊のまへにことによく咲たるさくらの有ければ重教　白妙に咲こそみつれ山桜とながめけるに取あへず　雪と見へけん花やこのはなとはつゞきたるやいかゞあらん。たそがれになりてあゆむつづてうつわらはべに里の名をとへば井の内のさとゝいふ。

へ雨はれし春のゆふべにきてみれば蛙鳴也井のうちのさと

向日の里にもどり富永屋といふはたごやにいりてゆふげなどたうべふしぬ。

四日　けふてけいとよし。朝とくおきてものなどくひいそぎ出たつところぐゝの花にあくがれよしみねとこゝろざす。小塩のさと十輪寺に入てみれば山のうへに業平朝臣がふるき跡なりとて卒塔婆めきたる物ひとつ立たるは何ともおぼへず。またうしほの池といふもかすかに残れり。こゝより山をのぼる道いとけはし。岩かどにいこひつゝからうじて善峰寺に参る。御堂のさまきはめていみじく花もおほく在ておもしろし。

へよしみねの花のさかりにけふくればたゞ白雲のうちにぞ在ける

みねづたひに行ほどに南のかたは伏水のさと巨椋入江淀の川つらまで霞のひまより見わたされてけしきいとよし。花臺といふところあり。むかし宇都宮頼綱入道蓮生法師といひし人の住て終にみまかりし跡となん。墓のまへのさくらの木のもとに　尋ね来てむかしをとへば山ざとの花のしづくも涙也けり大納言為氏としるして札のたちたるをみればいとゞ悲しさもまさりて涙にむせびぬ。

へかたぐゝのむかしの人を思ひ出て花のしづくにぬるゝ袖哉

山ごもりの僧に道のあないなど聞て出る。三鉢寺は堂ばかり残りたるが軒端くちて板間あらはにあればたたるに

うつりゆく世のさま見えてものすぎも中々あはれ也。ひねもすゆかのほとりにおほぞらを見るとずして過ぬ。  
薪おへる山がつのあとにつきて山路をこえて石臈にいたる。花のさかりいますこしはやけれどまさすが山寺のさ  
びしさは都にかはりてのどやかに住よかるべうおぼゆ。坂本長峰を過て大原墅にまうづ。御社いと神さびてかの  
物語にも雪たゞいさゝかうち散てとかきし御幸のさまなどおもひいづるがおかし。

へちる花にふりしみゆきをしのぶらん小塩の山のうぐひすのこゑ  
清和井清水をみて

へ大原のせかゐのしみづ澄ぬれどくむ人影は見えぬ也けり

花のてらはいかにと問へばまことにさかりなりといふ。いふにしたがひて行みる。西行上人の住給ひし庵はいづ  
くとへば山蔭なるあれたるわらやなりといふ。冨野沼をみて

へ大原のさえ野のぬまはさえやらで花の雪ちる春の山風

たづさへしひさごもつきたり。何をかなものせんとおもへどさらになし。よし簀かこひたる中に濃茶うるたうめ  
ひとりみけるをみつてしかどくのよしをたのめば坊のうちにいりてこはいひ少しばかりもとめ来りてくるゝ。  
これにてうゑをしのぎ出たつ。大江坂の花はちりがたになりていにしへの関路のおもかげみゆ。小島の御陵にぬ  
かづき葉室のさとを過、月読松尾の御社にまうで大井川にいたる。あらし山の花は此ごろの雨にうつろひしとみ  
ゆ。つどひたる都人川原にむれゐていとさわがし。大官人の馬にくらおきて逍遙しけるもあり。遠つ国よりのぼ  
りたるわかざむらひのゑひしれて花などきりありくは心なきわざ也。とにかくにうちつきてみん心しらひもうせ  
ぬれば青葉のころ郭公きゝにこんといひて哥もよまずたちさりぬ。大秦の花をみて夕つかたわがやどにかへりぬ。  
かりそめなる一よのたびにいたくゝたびれてねんとしかどもわすれぬさきにと灯火のもとにたどるゝかいつけ

置ぬ。 平千胤

明治二年三月四日

〔補記〕明治二年三月三日、千胤は林重教と共に西山の花見に行く。兼清正徳「桂園派歌人遠藤千胤」に「西山花見の記」とされた紀行文である。前年の鳥羽・伏見の戦いのこととは思えぬ文章ではあるが、それでも文中に「遠つ国よりのぼりたるわかざむらひの多ひしれて花などきりありくは心なきわざ也」と言つた表現もみられ、当時の情勢を伺い知ることができる点に注目したい。

《翻刻②》

南地記行

ことし四月一日より寧樂なる東大寺にて正倉のんをひらき博覧会をまうけしよし聞てわが友田中教忠尾崎実夫たりをいざなひみにもせんとして都をいづるは五月四日巳過るころ也。

竹田街道にて

ゝ道すがひ乗すがひつゝ行違ふちから車のしげき道哉

鳥羽にて

ゝ菜種さくとはだの原をみわたせば口なし色に立霞哉

みちのほとりなる田にたねまくをのこあり。かの権兵衛ならむと人々いふめり。

ゝ春田に種まくをのこ一度はおはすはあるべからすといふらん

向嶋より巨椋の入江をわたる。

ゝおほくらの入江の芦のめもはるにかすむ浪まを漕わたる哉

久世の神社にまうず

廣野新田にて

久世のさとにて

久世のさとにて

久世の神社にまうず

久世の神社にまうず

久世の神社にまうず

久世の神社にまうず

長池にて

久世の神社にまうず

久世の神社にまうず

久世の神社にまうず

久世の神社にまうず

久世の神社にまうず

久世の神社にまうず

久世の神社にまうず

久世の神社にまうず

久世の神社にまうず

ゝ藻しほ草かきあつめたるみたからにみるめもたゆく成にける哉

蘭麝待

ゝ年をへてつもりし塵もかをれるは空だきものゝ名にや立らん

春日神社奉納 旅亭当座

残花

ゝいにしへのならの都の遅ざくらむかしの色はうつろひにけり

古寺松

ゝ松風の音もかすみて古寺の春のゆふべはさびしかりけり

社頭藤

ゝ春日山松にかゝれるふぢ波は神の心に靡く也けり

春日社内鹿菌をみて

ゝ法ふかく鹿の園生を千早振神垣ちかくなどつくりけん

薬師寺仏足石

ゝ巖にもゑりし仏のあとをふみてまどへる人のおほくも有哉

法隆寺にて

ゝ級てるや片岡山の陰ふかき露にみのりの花や咲けん

夢殿にて

ゝ限りありて覚にしゆめの跡とへばたゞしら雲の薫る也けり

立田川にて

〱紅葉の影まだ青き水の辺に立田川ともおもはざりけり

国分峠にて

〱白波のたつたの山を風まじり雨さへ降てこえにける哉

弓削里

〱にしの宮由義の歌垣あれしより機織さとゞ成にける哉

淀川蒸気船

〱みしま江の玉江の水の濁れるはふねの煙の影になりける

山崎のあたりにて

〱昨日まで霞のおくに聳えにし生駒のたけに雲たちわたる

明治八年五月八日しるす

千胤

〔補記〕 廃仏毀釈によって荒廃した奈良において、明治八（一八七五）年四月一日から六月一九日までの間、東大寺大仏殿及び回廊を会場として、東大寺や法隆寺、春日大社など有力な社寺や諸家が所蔵する什宝や書画のほか、商工業製品・名産品などが出品された第一次奈良博覧会が開催された。この時はじめて正倉院の御物が出陳されたこともあつてか、当時の交通事情の悪さにもかかわらず、約十七万人の入場者を数え盛況であつたという（当館にはこの時の博覧会の陳列目録である「奈良博覧会物品目録」を収蔵しており（371A/677）、ウェブ上でも確認可能である）。田中教忠・尾崎実夫と共に奈良に遊んだ千胤であつたが、その時の詠には正倉院の香木「蘭麝待」や、帰路での淀川蒸気船が詠まれるなど興味深い。

## 大堰川すゞみの記

あはれ此ごろのくるしき暑さにたへがたきをいづくにまれ行てしのがんとて例の友なる尾崎実夫をいざなひおほ  
 む川にすゞみせんとす。八月一日暁の空まだをぐらきにわが宿をいづる。さて今ひとり心あへる友をと須川信行  
 をおどろかしみるにいぎたなくねぶたきさまにてこは／＼とおきいで「よくものし給ひつるかなしばし待たま  
 へ」とそう／＼しくゆづげなどくひてやがてつれだちいで行けり。都をはなるゝ頃やう／＼朝日はなやかにさ  
 しのぼりまづ打みやりたる夏野のはらのけしきひろ／＼とあをく茂りたるに壹点の露にしめりて咲かゝりたるい  
 とすゞし。紙屋川をわたり木嶋杜のほとりになれば水田の稲葉そよぎあへる中に水鶏の鳴くなどゆうにをかし。  
 太秦寺のまへなる茶店にいこひぬればむつかしげなる梁に「孤月照寒泉」といふ句をかけたなり。何人の筆にやと  
 間にあるじだにしらぬはいと口をし。帷子の辻は秋たちて尾花の袖にまねくらんと思へばいとなつかしきあたり  
 也。さがにつきぬ。しる人のもとにて舟の事などたのみ例の洗心亭にいる。薄茶などてんじて実夫いはく「けふ  
 の哥よむべきたうの題ところら似つかはしからんを」とすこし念じてつぶやきけるにおのれふと思ひいで「か  
 の邵康節の詩に風来水面時といふ句はいかに」といへばそれにせんとてさだめつ。舟人二人ばかりあやしげなる  
 舟にふなよそひして来れり。いざのり給へとて此川にとりし鮎むなぎさけはいはんなど舟にはこぶめり。人々も  
 打のりてさしいだす。むかふのきしなる楓の木のと広がりたるしたよせてつなげるほど高嶺よりさと吹おろ  
 すあらしに舟もかたぶくべうおぼえてすゞしさいはんかたなし。のみにのみて酔しれたり。舟ばたをたゝきて「桂  
 榴蘭槳」とずしつゝ千鳥が洩扇ながし檣木がふちなどいふあたりをさかのぼれば世にもしづかなる山川のそこ  
 ろ／＼の岩かどに釣人のおほく糸をたれたる。また梢には蟬のうつくしう鳴しきりて濱の鶯おいごえになりて残

りたるいと興あり。五丈ばかりもあらん巖のうへにふとき松の木のいづらともなく立ならびかつらのはひまつはれるなどさながら唐の画にもうつし出たらん心ちしていとめでたし。瀧のほとりにおいて忘草の咲たるを折かざしなどするもすべて心ゆくかぎりの遊び也けり。時うつれば舟をこぎかへし汀にあがりもとの亭にいりてわざとならずたとう紙のはしに哥などいさゝかゝいつく。

へ流れゆく水さへ清き山蔭の風のやどりはしる人ぞなき

日山のはにかたぶけば立出んとするに都より車の来れるにみなりのりてたそがれ過るころかへりぬ。 千胤しるす

《翻刻④》

しらゝの濱づとをかへすの文

津のくに曾根寄といふ里に住給ふ山内ぬし去年の十二月の末つかた紀の国牟婁の温泉にいでたゝせ給ふことありけり。君はおほやけにつかへてつねにいとまなきを過しころよりとかく病にわづらひ給ひけるがそをいやさむとおもひ立しなるべし。おのれも共になどそゝのかされしを大かたの世のことはかゝづらはぬ身にしあなれどさすがに年の暮のいそがはしさにまぎれてえものせず成ぬ。其後曾根寄の家をとぶらひ何くれとかたたらふついでにかの時の日記なりとてとうでさせ給ふをかりもて来てひらきみるにかねてよりなつかしきところの海山のけしきをまのあたりに残る隈なううつし出られたり。つぎ／＼もて行になどか思ひたゝざりけん今更あしづりをしてくゆれどかひなし。されど有田の里のあべ橋のかぐはしき言の葉に心ひかれてともにあそびしにもをさ／＼をとらざりけり。さるべき所あまたあるが中につら／＼其道すがらのさまをはるかにおもひめぐらすにまづ遠里小野の冬枯にさえわたる霜をわけて車をはしらせ高師のうらのあだ浪に暮行としを歎きもあへず紀の川の清き流れをくみて遠き水かみを思ひやり給ひしは何がしの朝臣の風調をしたひ給ふ心ならんかし。雄の山の初雪を

みて旅の宿りの寒かりし寢覚をわび給ひ岩代のまつのかれにし跡にむすびし人を悲しび給ひしはいかなる袖かはぬれとほらざらん。白良の濱におりたちて拾ひし玉には藻屑だにまじらざりけり。湯崎にいたりて海人の磯屋のかり住ひにかへる浪をみて難波の故郷をこひたりしは妹がむすびしひも吹かへすとよみし佛にや似たりけん。御船山にのぼりてまつ風の音にもふりたる行幸の跡をたづねられしは千代の古道をもおもひよせ給ふならん。田辺の里のさごし鮓に妹が玉手をなつかしみ給ひしはほやの妻の飯鮓にもその味ひやまさりつらん。鉛山の五景に魂をうばゝれてかき流しつる水茎の跡もこゝにうかべる心ちし侍り。すべてみるものきくものにつけていひ出し給ふ言の葉ことくく玉ならぬはあらざりけり。わきていみじう覚ゆるはむろの温泉の長歌也。神さぶるむろのいで湯はとあまたゝびうたひかへし調べかへすに橘の葉の名におふ霜のふることをさへ思ひいでられて其こゝろをゝしくそのすがたみやびやかにしていとめでたくもめづらしくもよみ給ふものかな。あはれいまの世にもかゝる正雅の風韻あるはいにしへの人たちにもをさゝはづべからずとひとりごちつゝ二たび三たび手をうちてさしおきぬ。さて此巻をかへしまゐらせんとするに何とかこれがうはぶみあらまほしき心ちせられ侍ればいとみだりがましきわざながらかのうらにえられたる玉のちなみもあればかりに白良の浜づとゝ名づけ給はゞいかゞあらんとひそかにおもひつゞけ侍りて光なき一言をかいつく。

へ紀のうみのしらゝの濱のしら玉の世にめづらしきこゑたてつなり

かくいふものは平安の都に住る紫園のあるじ 平千胤

明治廿年といふとしの三月難波の宿りにありてしるす。

〔補記〕 山内芳秋については『芳秋遺稿』を参照されたい ([http://archive.wul.waseda.ac.jp/koshu/he04/he04\\_02319/](http://archive.wul.waseda.ac.jp/koshu/he04/he04_02319/))。山内芳秋から牟婁温泉に湯治に行くに誘われたが都合の悪かった千胤は、その後その折の紀行を読む機会を得、この文章を書き一首を副え

た。文中「わけていみじう覚ゆるはむろの温泉の長歌也」とあるが、明治四一年に刊行された『芳秋遺稿』には長歌が収録されていない。ただし遺稿中「新宮にまかりける時」と端詞にある歌が収録されている。こうした文のやりとりが、刊行を意識されずなされているのである。

※

※

千胤などの一歌人の活動を残された資料群から考えるとき、歌会での詠草が重要なのもちろんだが、その一方で写本として残された多くの紀行文をみれば、文を書く営為も、その活動において重要であったことが判る。今般翻刻を控えたが、千胤旧蔵資料に存する大原紀行を記した「山路のかつら」などは、その字体からみて、一緒に旅をした小出繁が書き記したものを千胤が写しとっている。また、今般翻刻した「しらゝの濱づとをかへすの文」でも、自分の書きためたものを見せ、それに応える文を書き渡している。たとえば次のような発言をみれば、千胤周辺の歌人たちにとって、文章（紀行）を書くことが重要なものであったことに改めて気づくだろう。<sup>3)</sup>

題詠の歌はすがたこと葉すぐれたるも、みるものきくものにつけて真心をうたひいでたるにはおよびがたきものなり。縁語秀句にすがりてつくりなすをたけきことゝおもふめるきはゝ、いふもさらなり、題をとればやがて事物にふれたる時としこゝろもしらべもまことをむねとするさかひにいたれる人すらおのづから感情内に動きて歎声外にあらはれし歌のやうにはよみかなへがたかるべし。くちなし園のあるじくちをひらけばこのことをなんいはれける。

文もまたかくぞあるべき。そも／＼記行としいへば其所々の古事本説などものとほき考證にちからを尽して、めものまへなるうみやまのありさまうつし出んとも思はぬはものしり人のくせなり。ひきかへてこの麻衣あら／＼とはものせられたれど文のいきほひ歌のしらべものゝまことにたがはず題にてつくりしとは死活のさかひきはやか

なる実地のしるしをみせられたり。今の世の歌よみわれも人も題詠のくせにしみつきてやゝもすれば死物におちいるやまひのいやし難きをうれへおもへりにこの日記はそのよきくすりとみゆるがうれしさにまきの末にかけたるをさぐるごとうべなふ人はありやなしや

小出繁『榎園紀行文章』下（国立国会図書館蔵、明治三十六年刊 [info.ndlip.jp/id/889067/](http://info.ndlip.jp/id/889067/)）に収まる伊東祐命の文章より抜粋した。今の世の歌よみたちに対し「題詠のくせにしみつきてやゝもすれば死物におちいるやまひのいやし難き」とし、「みるものきくものにつけて真心をうたひいでたるにはおよびがたき」ことを言い、「文もまたかくぞあるべき」とする。紀行とは将に「みるものきくものにつけて」記されたものとして評価している。おそらく残された詠草だけではなく、こうした紀行文も含め、当時の実態を把握してかかることが今後の研究において重要なであろう。

## おわりに

遠藤千胤という一歌人の旧蔵資料を瞥見して、三つの観点から資料を紹介した。従来「旧派」などとして括られてきた歌人の研究もようやく端緒についたばかりである。残された資料に基づき、先入観なしに確認していくことが重要であるし、決して一括りにできるものではないことも確かなことだ。一般の資料紹介が少しでも役にたつのだとしたら幸いである。

## 〔注〕

(1) 目録には次のように記載されている。

遠藤千胤旧蔵邦光社関係資料 一括

邦光社歌会第一～四集校正本・配布証印記冊七冊、邦光社社員仮名簿等名簿四冊、邦光社歌会写本三冊、明治二十三年邦光社第三回報告、菊下葉集歌人名簿、邦光社大阪部規約・同補助人名書・同事務所処務条例、「西山紀行」「菊の詞」「阿之婢考」等千胤写本・草稿類十五編、【書状】土方久元一通・高崎正風一通・渡忠秋二通・黒田清綱十二通等 計約五十点

(2) 架蔵本により『菊廼下葉』について簡略に書誌事項を記す。

外題「幾久能志太播 全」、見返し「明治十九年五月／菊廼下葉／向陽社蔵版〔向陽社記〕」、三條実美題字

（明治十九年五月）二丁、漢文序（明治十九年五月主殿権助正五位勲五等宇田淵撰／正七位勲五等西尾為忠書）

二丁、菊の下葉序（明治十まり九とせといふとしの四月 近藤芳介しるす）四丁半、ウラ白半丁、本文（春附

属新年九丁／夏七丁／秋十丁半／ウラ白半丁／冬八丁半／ウラ白半丁／雑十丁半／ウラ白半丁／跋文（明治十

九年四月 小出榮しるす）一丁半／刊記（明治十九年五月廿八日出版御届同年七月二日刻成／編輯人東京府土

族京都府下上京区廿四組三本木町六番戸寄留小出榮／出版人京都府平民上京区三十組八幡町七番戸北村四郎

兵衛）半丁

以下、参考までに①近藤芳介序文と②小出榮跋文とを示しておく。

①菊の下葉序

これの向陽社の歌会は。京都華族のかたぐゝを限りたる会なりけり。そもこの会のおこれるはじめ。また此集のなれるゆるよしはいかにといふに。明治のはじめ。いまだ世の中おだやかならざりしほど。人皆ますらをさびて。万の風流わざはさらにもいはず。皇国風のむねとある。歌学びをさへ。めしきものにおもひなし

て。かりそめにも。かながきの書は。手にだにふれぬばかりの。ありさまなりしを。かけまくもかしこき。天皇の大御こゝろに。いたくなげかせ給ひて。いにし明治の十一年ばかり。京都華族のかたぐゝに。歌学びせよと。うち／＼のおほせごとありて。その会費に充つべき。こがねそこばくをさき賜りて。山本実政卿に。その事を擔はしめ給ひ。かつ宇田淵君にも。賛けなすべくおほせおきてさせ給ひけり。実政卿かしこまりて。村山松根。拝郷蓮茵の両翁を教師にえらび。はじめて此会を。ひらかれたるになむ。しかるに実政卿は。召されて東京へ登らるゝによりて。宇田君もはら掌らるゝ事とはなりにたり。また村山翁は。なき人のかずにいり。拝卿師は。八十に近きよはひなるをもて。いなみてしぞかれぬ。そのゝち教師には。御歌掛小出繁君をもて。宮内省よりさし遣はされ。はたおほけなけれど。おのれをもそのしりにつらならしめ給へりけり。また月次会の外に。研究会をも開かれて。此会には。三条西乗禅。大橋長憲。植松有経。尾崎実夫。遠藤千胤など。此道にあつき人々をも。つらならしめ給ひ。すべて桂宮にてなむ行はれける。それよりこのかた。をりにふれて。高崎正風君をはじめ。侍従のかたぐゝもて。しば／＼せちにせめさせたまひ。あるは臨時にも題賜はりて。歌奉らしめたまひなど。菅の根の。いとねもごろなる。大御こゝろしらびのほど。あなかしこ。なほざりに。おもひ過すべきわざならめやはと。会員の人々。おのも／＼。つとめはげまるゝまゝに。やゝそのしるしも。あらはるゝばかりなるは。此道にとりて。こよなきよるこびにこそ。かくて年月をふるまに／＼。瀆の真砂の。かずおほくつもりぬるが中に。あはれとおもふしらべ。をかしと見ゆる言の葉をつみ出で。すり巻となして。廣く世の風流士たちにもしめしなば。やがてふかき大御おもひけの。かたじけなさを。うかがひ知りて。おのづから。この道の助けとも。なりなむかしと。宇田君こたびおもひおこして。小出君にあとらへて。えらばしめられたるなりけり。さてこの稿を。おのれにしめされたるを。つら／＼見侍りけるに。玉の中に。石もまじ

れるこゝちせられて。芳介等がえせ歌をさへ。載られたるに。小出君。みづからのをのせられぬこそ。いとほいなきわざなりけれ。いにしへより。勅撰集はさらにもいはず。近き世これかれえらび出せる。わたくしの歌集。皆撰者の歌をも載たれば。などかははゞかることのあるべきと。宇田君にはかり。小出君にこひて。十首ばかりを。書加へて返し侍りぬ。かくてこの集を。菊の下葉としも。名づけられたるは。上にいへるゆゑよしどもを。ほのかに匂はせたるならむかし。

しら菊の花のうてな露ちりて下葉も千代の香にゝほひつゝ

明治十まり九とせといふ年の四月 近藤芳介しるす

②ひと日宇田君の京都華族のうたのことにつきてなにくれとものがたりのついでにかつらの宮のうた会の詠草のうつし一卷をとうでたればとしごろこよなきおほみめぐみとひとどくのいたつきとのつもれるものなりかくてうちおかんもはえなきこゝちするをおなじうはさるべきがすりをだにかずぬきてよといはるゝにおほひなきことゝはおもふものから宇田君のよろづにおもひめぐらさるゝこゝろざしのせちなるにえいなびがたうてより／＼かい出つるがかく一卷とはなれる也けりもとより世にもていづべきものにもあらずたゞこゝろのひくかたにいさゝかぬきいでゝ宇田君はじめ人々のあげつらひをもきゝておのがまなびのたすけにもとおもひてものしつる也けりさるをこたひ清書してといわるゝにいかゞはせん近藤大人にもはかりていかにぞやといはるゝふじ／＼はたゞしつれど猶あやまりどものおほからんはより／＼人々のたゞしたまはんことをねがふになんかつ巻中人々のうた数おほきすくなきひとしからぬは巧拙によれるにあらずもとのうた数の多少にしたがへる也すべては近藤大人のはしがきにつくされたればふたゝびいはず

明治十九年四月 小出繁しるす

(3) 紀行文などを確認するに、仮名遣などを後から見せ消ちで修正していることが多い。これは『明治天皇紀』第  
四・明治十二年十一月十日条に「彼等をして旧来の家伝・秘事を廢し、風調正しく語格・仮名遣等に熟達せる  
師に就きて修業せしむべきこと」とあつたことから重要視していたのであろう。

※本稿で翻刻した遠藤千胤旧蔵資料は、当館古典籍共同研究事業センターで実施している館内勉強会での成果の一部  
である。掲載にあたり翻字データの提供をうけたことを附記しておく。提供していただいた阿部由貴子・荒川美帆・  
内田真紀子・小宮山史・神亜紀子・丹治麻里子・平野圭子・布施紀子・前田真弓の諸氏に感謝申し上げます。

※本稿は JSPS 科研費 15K02285 の助成を受けたものである。

Research notes on the manuscripts of waka poetics previously  
in the possession of Endō Chitane

YAMAMOTO, KAZUAKI

We have presented, in the volume 42 of this bulletin, the report on manuscripts of waka poetics formerly owned by Endō Chitane in the early Meiji Era. In this article, we will present a report of manuscripts of waka poetics and discussion on the following three points which we did not mention in the previous report; ① Kōyō-kai related manuscripts ② Chitane-hyō-uta-awase (Waka matches evaluated by Chitane) ③ Chitane-Jihitsu-Kikō-bun (travel journals including waka poems written by Chitane).

In particular in the part ①, we summarized the circumstances concerning the establishment of a waka meeting / a research meeting (Kōyō society) which were founded because Meiji emperor encouraged the nobility of Kyoto to learn and practice Waka poems. In the part ②, we introduce the manuscript that can catch a glimpse on the part of the guidance of waka poems composition by Endō Chitane who inherited the tradition of Keien-ha (the Kei-en branch). The part ③ serves as a specific example of how Waka poets practiced Japanese writings, such as the travel during a turmoil in the early Meiji era and when visiting the exhibition of Shōsō-in Treasures held in 1875. Since manuscripts of waka poetics in the early Meiji period have not been fully introduced, this article is a report laying foundations for further research.